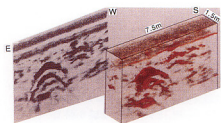
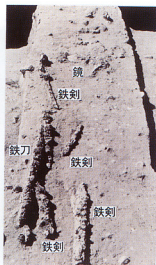
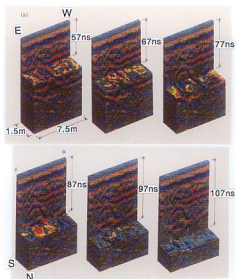


考古学および雪氷学における地中レーダ探査法

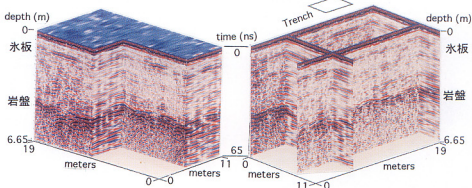
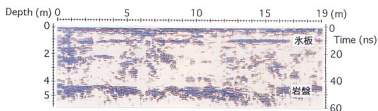
<富山大学 酒井英男>



1. 岐阜県養老町象鼻山1号古墳におけるGPR探査の結果を3次元プロットのソフト「スライサ」を用いて解析した。前面の図は16枚の断面図から作成されており、強い反射の双曲線パターンは遺物の連続性を示している。後面の図は、前面のプロファイルをShadow Patternで表してある。双曲線状の連続するパターンラインは、頂部に南北走向の埋蔵物(遺物)の存在を示している。



2. 左は、象鼻山1号古墳のGPR探査のタイムスライスによる解析結果を示す。右は、発掘調査の結果、墓坑棺内の底面で認められた副葬品の配置を示す。鉄刀や鉄剣等の副葬品が南北走行に近い方向を向いて、幅50cm程度の範囲に横たわっていた。探査で検出した異常はこの副葬品をとらえたものであると考えられる。



3. 立山室堂平の積雪層で4月に実施したGPR探査の代表的なプロファイル(上图)と3次元表示(下图)。積雪約4mの深度内に複数の反射面が認められる。深度1.2m付近の反射面は連続性が良く、トレンチの結果、同深度に分布する一様な水板の反射面と判明した。また、同範囲のレーダ波速度は0.16m/nsと水の存在を示したが、実際に、融雪水の帯水層となっていることが認められた。